姫の守り神

ハナモト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫の守り神

【Ｎコード】
Ｎ４３５４Ｚ

【作者名】
ハナモト

【あらすじ】
ある日の朝、カルシアが釣りに行ったら一人の女性が流されてきた。嫌々ながらも彼女を助けたカルシアは自然と彼女の大きな問題に巻き込まれていく

01　流れてきた女

いつもどおりの朝だった。
何の変哲も無い朝だったのだ。
だけれど今日は勝手が違う。
俺はいつも通り、今日の食事を取ろうと川へと向かっただけだ。
流れが少し速いものの、穏やかで大きな川。
随分と繰り返した動作で釣り糸を垂らし、すでに二時間ほどが経っていた頃。
十分に食事を釣り上げ、後一匹で終わりにしようと思っていた頃。
なんで切り上げなかったのかと、後から酷い後悔に苛まれてしまった……

「……なんだ、あれ」

思わず呟いてしまう。
川の中ほどをゆらゆらと黒い物体が右から左へと流れていくのが目に入った。
汚れのまったく無い綺麗な川には似つかなく、遠くからでも酷く目立って見えた。
じっと目を細める。
あまり見たことの無いものだった。何かよく分からない。
なんだろうかと考えて、ようやく一つの答えに辿り着いた。

「……人、かな？」

木の枝か板かを抱くようにしている人に見えた。

自信は無い。
とはいえ人だとしたらさすがに放っておくわけにもいかない。
少し悩んだものの、服を脱ぎ捨てて助けに行く。
川は子どもの頃からの遊び場だ。泳ぐことに何の問題も無い。
勢いをつけ飛び込むと黒い物体にまで近づいていく。
流されていくその物体にすぐに追いつき、ようやくはっきりと物体の正体を見る事ができた。
それは黒い服で男装した長い黒髪を蓄えた女性だった。それも飛び切りの美人。
しかしそれを喜ぶ気にはなれない。

「やっぱり人間か……」

少々の嫌悪感を感じながらも抱え込む。女性独特の柔らかな感触が腕の中に広がった。
岸まで何の問題も無く辿り着くと、すぐに女性の呼吸を確認する。
さすがに川の中でそんな確認をする余裕は無かった。

「……息があるな。気失ってから川に落ちたのかな？」

一人ごちると脱ぎ捨ててあった服を着て女性を背負う。思っていたよりも重さは無い。
釣り道具を取り、帰路に着いた。妙な拾い物をしてしまったと若干の苦々しさを感じながら。

ちょっとした森の中にある、住み慣れた小さな家に入ると女性の濡れた服を脱がせて体を拭き、自分の服を適当に見繕って着せるとベッドに寝かせておく。

すぐに家の外に出て石を組み、あらかじめ集めてあった枝を使って焚き火を作る。
人間を連れてきたこと以外はいつもの日常。
慣れきった手つきで火をつけ、釣ってきた魚の腸を小さなナイフで取ると順に焼いていく。
炎が目の前でゆらゆらと揺らめく。
魚が焼ける間に彼女の濡れた服を木の間に干し、女性の様子を少しだけ見ておくことにした。
たいして物を置いていない家に戻る。
目に付くのは壁に立てかけられた古い剣とベッドと、肘掛け椅子にいくつかの本。
その中で女性だけが異彩を放っている。異物のように思えてならなかった。
この家にあってはならないもの。
そんな感じが胸の中を占めていた。
女性の顔を上から覗き見る。人間自体を見るのがいくらかぶりで、かなり久しいことだった。
しばらく起きそうに無い。
嫌悪感以上の興味が無くなり、焚き火の元に戻る。魚は十分に焼けていた。
無造作に一つを取りほお張る。大した味も無い、食べなれた味がした。
三尾目を手に取った時、家の中の空気が動いた気がした。
手に取ったばかりの魚を戻し、意外と速かったなと思いながら家の中に戻る。
扉を開けると予想にたがわず、女性がベッドの上で上半身を起こしていた。
「起きたんだ」

声をかけ、家にたった一つしか無い椅子を持って近づく。
女性は驚きの目をこちらに向けている。何が起こったか分からない、そんな目だった。

「……ここは？」
「俺の家だよ」

ベッドの横に椅子を置き、そこに座る。

「川に流されてるのを見つけたんだ。何があったか覚えてる？」

優しく聞きたかったが、どうしても声音が冷たいものになるのを自分で感じた。
人間は信用できない。
頭の片隅で常に警鐘が鳴らされているのを感じる。
女性は少し考え込む表情を見せた。

「川……。ローヌ川？」
「そういえばそんな名前だっけ。呼ぶことも無いからはっきり覚えてないけど」
「……今日って何日？　ここってどの辺り？」

どうにも偉そうな態度で少しむっとする。別に感謝が欲しいわけでもないが、気に入らない女だ。

「……皐の十日だけど。ここはローヌ川の下流の近くで、クルーラント側」

一瞬、適当に言ってやろうかと思ったものの正直に答えてやる。

「皐の十日……。まだクルーラントね」
そういうと女性は勢い良くベッドから降りた。
「そう、分かったわ。ありがとう」
「もう行くのか」
思わず顔が綻びそうになるが、必死になんとか抑える。
「ええ。急いでるから」
女性は家の扉を勢いよく開けて外に飛び出して行く。
今度こそ口元に笑みが浮かぶ。自分から出て行ってくれたのだ、有難い。
ほっと一息つくと食事を再開するべく、家の外に出る。
すると勢い良く飛び出して行ったはずの女性が、家のすぐ前で固まっていた。その視線の先には彼女の黒い服が干してあった。
どうしたのかと思いながら後ろ手に扉を閉めると、女性がギギィ〜という音を立てながら首をこちらに向けた。
「……あの服は何ですか？」
指を刺しながら訊いてくる。心なしか声が微妙に震えている気がした。
「あの服？」
「……あの黒い服。あなたのですか？」
どうにもよく分からないことを訊く。

「あれは君のだろ。見て分かんない？　大体、君の着てる服も俺のだし」

彼女は視線をゆっくり下げて、自分の服を見直した。

女性は完全に固まった。

「……どうかした？　俺の服が気に入らないなら、自分の服着て行けば？」

自分でもちょっと冷たいかなと思ってしまうような声音。

親切で変えてやったのに、その態度は無いだろう。

彼女が俺を真正面から見据えるようにして、口をパクパク動かす。声は出ていない。

「……俺、口読めないから声出してくれる？」

彼女の口が止まり、一度大きく深呼吸する。そして意を決したような視線を向けてきた。

「……見たの？」

「何を？」

「何をって……その、……私の体」

「ああ、見たけど？　そうじゃないと着替えさせられないし」

「何考えてんの！　気ぐらい使いなさいよ！」

と、耳鳴りのするような大声を発し、俺は耳を両手で塞いだ。彼女の顔は茹ダコのように真っ赤だ。

「……うるさいなぁ。そんな大声じゃなくても聞こえるよ。濡れた服のまま寝かせとくわけにもいかないだろ」

「そういう事言ってんじゃないのよ！　人の裸見といて何よ、その態度！」

さすがにむかっ腹が立つ。

「助けられといて、お前の方こそなんだよ。あのまま放っておいたらお前死んでたろうが」

「そんなの、私の裸見たのでチャラよ！　チャラ！　むしろ私の方が払いすぎたくらいじゃない！　信じらんない！」

「ああ、そうかよ。もう何でもいいから、とっとと行けよ」

もはや苛立ちも隠せない。隠そうという気もなくなっていた。

とにかく彼女を立ち去らせることが肝要だった。

顔を真っ赤にした彼女はすぐに立ち去るかと思ったが、真っ直ぐに魚を焼いていた焚き火へと向かった。

黙って焚き火の傍に座ると、少し焼きすぎた魚をほお張り始めた。

「おい！　それは俺のだぞ。勝手に食うな！」

「いいじゃない、こんなにあるんだし。お腹空いたから貰うわよ。それに私の裸見たでしょ、これぐらいじゃ足りないわよ」

あまりの言い様に後ろから殴り飛ばしたくなったが、震える手をなんとか押さえて、深呼吸する。

何とか自分を落ち着かせると彼女の前に座り、あまり食べられないうちに食事に取り掛かる。

食べ終われば出て行ってくれるのだ、それまでの我慢と思い定めた。

彼女がじっとこちらを見つめる。顔はまだ赤い。

「……そういやあんたの名前、聞いてなかったわね」

「……カルシア」
「私はリーラね、よろしく」
すぐに分かれるのによろしくも無いものだと思い、俺は返事をしなかった。
「それにしてもこれ、まずいわね。食べれないほどじゃないけど」
我慢できるかどうか、自信が無くなってきた。

02　逃亡開始

「……あんたって私の事情、全く聞かないのね」

すでに魚を食べ終えたというのに木にもたれて座り、未だにここにいるリーラが不思議そうに訊いてきた。

俺からしたらそんなことより、何故まだ居るのかが不思議でならない。

こちらもすでに食べ終えて、今は剣の修行をしている最中だった。彼女はその様子をじっと見ている。

「訊いたところで仕方ないから。リーラはもう行くんだろ？」

「そのつもりだったんだけどね」

さっさと行けと遠回しに言ったのだが、リーラには分からなかったようだ。

横目で見ると、指を組みながら人差し指で指遊びをしている。

「どうして行かないんだ？」

「……連れとはぐれちゃってね。よくよく考えたら、道、分からないのよ……」

「迷子ってことね」

呆れた、それでじっとしていたわけか。おまけに素直に案内を頼めずにいたようだ。

散々悪口に近いことを言っていたから気まずいのかもしれない。

横目でリーラを見ると、やはり気まずそうな表情をしていた。

「……はぁ、仕方無いなぁ」

いつまでもここにいられても困るので振っていた剣を止めて鞘に納めながらそう言うと、リーラの表情が目に見えて明るくなった。

「ホント？　連れてってくれるの？　ありがとう！」

とはいえ、まだ連れて行くとも言っていなかったのだが、リーラの脳内では俺が連れて行くことに決まったようだ。

ため息を一つ吐き、彼女に近づいていく。

ヒュッ。

小さく鋭い風を切る音が聞こえ、考えるよりも先に体が動いていた。

視線を左から右へ横切ろうとする何かを、鞘から剣を抜いた勢いで下から斬る。飛んできたのは矢だった。

それも真っ直ぐにリーラを狙っていた。

狙われた彼女自身は何が起こったのか分からず、キョトンとしている。

「こっちに！」

彼女の手を握り、飛んで来た方とは逆の方向の森へと入る。

ここだと弓矢はよっぽどの名手でも無い限り使えない。

「ちょ、ちょっと、どうしたのよ？」

リーラは今起こった出来事すら把握出来ていない様子だった。

「今、矢で狙われた！　お前、何に巻き込まれてるんだよ」

「え！　ホントに？　こんなに早く来るなんて……」

彼女の声音に明らかな恐怖の色が混じった。
いかにも気の強そうな人だったので意外にしか思えない。

「お前に敵は多いのか？」
「どういうこと？」
「どうもこうも無い、早く！」

自然と声が少し大きくなる。

「お、多いわよ……」

声音が弱々しい。彼女の呼吸も乱れ始めている。あまり長く走れそうに無いことは簡単に予想できた。

「分かった。――っ！　危ない！」

慌ててリーラの腕を思い切り引っ張る。

「きゃっ！」

リーラが痛そうな悲鳴を上げたが、多少の痛みぐらいは我慢してもらわないとならない。
森の中だというのに、正確にリーラめがけて矢が飛んできたのだ。
偶然かと思ったが、すぐに頭の中でその考えを否定する。
ここは最悪を考えた方がいい。森の中でも正確に狙える弓の名手。
背後を振り返ると、背の高い男が走りつつ弓に矢をつがえているところだった。
さすがに走りながら矢を射ることはしないだろうが、やってしま

いそうな雰囲気を放っていた。

「こっちに」

進んでいた方向をほとんど直角に右へと変える。

敵が奴だけで無いなら挟み撃ちぐらい考えているかもしれない。

「こっちに行くと逃げれるの？」

「あのまま行くよりはマシだ」

多くの説明をしている時間も無い。とにかく今は逃げ切ることが重要だった。

どんどんと、より木の多い森の奥へと入り込んでいく。

空を見上げると、雲ひとつ無い快晴。

暗くなればどうにでもなるだろうが、まだ昼にもなっていなかった。

おまけに太陽が隠れてくれることも期待できそうに無い。

とにかく今は森の奥、アミシラ樹海へと進んでいった。

かなり走り続け、どうにかあの弓の使い手は巻いたようだった。

かなり木が茂った場所まで来てようやく足を止める。

「この辺りまでくれば、とりあえず大丈夫かな」

適当な木にもたれかかる。さすがに走りっぱなしで疲れた。呼吸が少し荒くなっている。

リーラはといえば木にもたれて座り込み、もう動けないといった様子だった。

とはいえここが安住の地というわけでもない。しかも昼を少し過ぎた頃でしかなので、まだまだ危険だ。
しかし少し話す程度の余裕はある。
「疲れてるとこ悪いけど、何があったか話してくれる？」
「……ちょっと、……待って……」
呼吸が全く整っておらず、確かにこれでは話せなそうだ。
じっと彼女が呼吸を整えるのを待ってやる。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
一緒に走っているうちに気付いたが、どうにも思っていたよりも歳が若そうだった。
二十ぐらいかと思っていたのだが、おそらく十代半ば。
「ふぅ……、もう大丈夫」
「大丈夫なのは分かったから、事情を話してくれ」
「ええ……」
少し逡巡する様子を見せた。
「どうした？」
「……あなたが危険になるから」
「今更それを言うのか」
すでにもう巻き込まれている。まったくもってなんでこんな目に遭っているのか、腹立たしいこと極まりない。
そもそも何故俺はリーラの腕を引いて逃げてしまったのか……
だからといって、目の前で殺されそうなのを放置するという選択

肢も無いが。

「……そうね。だけど、多分信じてくれないんじゃないかなって……」

「話してもらわないと信じようも無いんだけど」

「……そうね、うん。分かってる。でもごめん、話せない」

自然と舌打ちをしてしまった。リーラの言い様だと喋ろうか迷っているという感じだったが、この状況で黙られても困る。

「話してもらえないと対応のしようが無いんだけど」

もはや声音に怒りが混じるのを抑えられなかった。

彼女に会ってから不満ばかりだが、そろそろ我慢の限界に近い。

「君は一体どうしたいんだ？　俺をどうさせたいんだ？」

「……ごめんなさい」

珍しく悄然とした様子で謝られ、振り上げた拳のやりどころを無くしてしまった。

「……分かった。詳しく話さなくていいから、状況だけ簡単に話して欲しい。リーラはどうしたくて、あいつは何なのか」

「……私は今、狙われてるの。だから国外に逃げようとしたんだけど、川に落とされちゃってね。さっきの弓の男は多分私を狙ってる奴の部下」

ようやく事情を話し始め、怒りが多少収まる。

「ストリアにでも行こうとしてたの？」

「ええ。さらにその向こうのファサリアまで行こうと思ってるわ」
事情は分からないなりにも、多少は察した。つまりこの娘は国の中枢に関わる人物の親族なわけか。
国外に逃げるような理由なんていうのは、犯罪者か政争に敗れるかのどちらかぐらいしかない。そして犯罪者なら身柄は狙われても、命は狙われない。

「ふぅん。となるともう国境は封鎖されてるかな」
「え？」
「泳いでいくのが速いんじゃないか？　ちょっと大きな川だけど、泳いで渡れないことも無いし」

国境にされるだけあって、かなりの川幅があるが流れはそう強くない。
だが言いながらも、人間にはきついかと思ったが、予想にたがわずリーラは不審気な顔で首を横に振った。

「あんな川渡るなんて、とても無理。それに私泳げないし」
「……川に流されてて、良く助かったな」

気を失っていたことと、偶然顔が水面から出ていたのが幸運だったのか。

「まぁいいや。とにかく夜までなんとかしようか」
「夜？」
「夜になれば何とかなるから。策はある」
「さく～？」

リーラは驚いた表情をした。というより不審気な表情だ。俺が考

えたのは策というほどのものでもないし、確実にうまくいくかも分からないが、できるだけ自信のあるように言う事だ。
自信が無いと思うより、自信があると自分で思い込むために。

「本当にあるの？」
「たいした事は無い。ようはうまく逃げようって事だから。それをやろうとしたら太陽が出てる間は無理なんだよ」
「へ～……」

どうにも気の抜けた返事だ。信じているのかいないのか、よく分からない。
もしかしたらおそらく彼女は状況を正しく把握仕切っていないのかもしれない。
リーラが犯罪者でなく政争で負けた要人の家族であり、なおかつ国の中枢にまで関わるような要人だった場合、大体の場所がばれている今、かなり追い詰められている状況になる。
全て仮定で成り立っているが、彼女の経歴を聞いていない現状では、最悪を想定して行動するしかない。
巻き込まれた形だったが、ここまできたら助けるつもりでいる。
だからこそ今ここで、彼女の状況を伝えようとした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4354z/

姫の守り神

2011年12月16日01時46分発行